利根川畧志

JL 4
3221
4

山藤

利根川圖志卷四

下總　布川　赤松宗旦　義知　著

印幡沼　印幡郡ふり其水上い船尾村神崎橋よ㆑落ㇾさ一方ハ佐倉の城山をめくりて鹿嶋橋ふり落つ下ハ安食ふり利根川ふ合ㇾ凡長さ七里廣さ二里許沼の中ふ佐久知穴ㇾさ花嶋山等あり其外古跡多ー佐倉風土記云倭俗曰沮澤爲沼此亦舊曰印幡沼又曰印幡湖此江也首尾四十餘里有舟檝之便多魚鰕之利而下引海潮宜言江而或沼或湖者鄉語爾故今以江稱焉大江千里有歌曰志毛鬪佐乃伊波能宇羅奈微多豆良之目不那比等佐王伎可羅艫於須奈李其稱浦者盖亦尚矣其源出於神船尾之西北受二小流一自戸神佐山之間一自神平戸之間流會于船尾下廣可二一里而東流六七里至師戸會於鹿嶋橋下流而廣可二一里

印湖

ル4 3221 4
昭和九年九月二九日購求

又東少北流七八里而至平賀自此北折彌張大而瀦廣袤十餘里浸於印幡埴生二郡而北過安食分爲燕尾以入利根川其汎濫之患常在巽風而未必在潦水爲蓋利根川東南朝海若遭巽風帶雨則自海口吹上而水逆行溢入于此焉耳江之爲景不宜于平肴蘆荻遮望也宜于登臨者平賀爲佳飯野次之烟收水澄一鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐羣屏畫開者平賀之望也浩大江一條鎔銀以爲長帶水外綠洲禽飛馬風和斜日而面富士峯于且千里表者飯野之眺也凡環江村三十餘佐山也神也保品也青菅也先崎也臼井也江原也角來也佐倉也山崎也下根也飯野也土浮也荻山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾繞于兌離震以終于坎爲船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也鎌刈也瀬戸也山田也平賀也吉高也松蟲也荻原也中根也笠神埜原也卜杭也皆連

印西而起終囲繞效印東者爲吉高東可二里江中有二穴一北一南相違四五十歩徑各可五十丈水色深玄底不可測旋渦甚急舳艫難過村民謂之佐久知穴佐久知鰻魚之小者時集于此穴下網取之無數故名焉北須賀以北江上夏間陰濕之夜火出氷中離水數尺非漁火非鬼火須臾散或五六十或百數十若往若來或索或聚乍遠乍近又高又低以窮數時而滅焉亦江上一奇也

田國雜記標註巻上云九月廿八日稲穂の別當ゲ坊ふく湖水をなゞめとく　文明十八年丙午也

山色湖光烽又窮　郷書曾不託飛鴻
砧聲近報孤村晩　旅懐何堪憂患朗
又云ふ小春けちるしふやいさゝのどうふ侍られてみもく
いふぼの湖水ふうびく舟のうちみて酒ふと臭行し侍りき
冨士の嵓湖ふうつれる心をそふくよもべさよし申されバ

みうみの波間ふうげとやごうきてみあぐひあるふとをえるこうふ道興准后後知足院関白左大臣房嗣公ノ子三子道興法務大僧正准三宮三山手新熊野検校聖護院

土産　鯉　鮪　鱒　鱓　鯰　鰻　鮧　鯢　鰭　腹赤魚

サイ　マルタ　蟹　海老ツノガラエビ中エビ　ヌカ毛　蜆　田貝蛤珠アリ

ゲバチ　魚譜ヲギバ鯛魚一名黄顙魚トモユナマヅヽ似テ少シ背及ビ腮ノ下ノ鬐ヽ人手トフルキバ螫テ甚ダ痛ム此魚ヲ捕レバごきくと啼ク此魚近年至テ少ヽ物類称呼ふぢ豆原ト三年申ノ秋東國所々洪水セラレテ頃ヲこの魚少ヽふえうくうて後鮫多く成ルト云リ実ニもと思ハル

水鳥　雁　鴨　ヒス　ナガ　ハジロ　タカ

ブ鴨　アヂ　鷺　鷭　鵜

水草　菱　真菰　蘆　蒲　荻　川骨　澤瀉　スゲなどの類

左多シ

佐久知穴　印幡江の廣き所吉高の東北七八町沖の方ヽ大小の穴立つありその北ふるを佐久知穴といふ大さ弐たゝ三間斗り深さ知べうらず水涌出るヽ多く黙ヽく永面より一二尺も高く吹上る故遠くよりよく見ゆ夏ヽ至まバこの穴の内へイナ（鯔の小ふるもの長さ六寸）多く集る（投網ヽ打て捕る）予或日朋友と云合せ三人連ゐて投網を携へ小舟ヽ掉さゝせうの佐久知穴へ心ざして行ヽ処とゝく平常出る漁師三人穴の側ヽ舟を繋たてこ呑居さゝ我等も其所へそろくと舟を漕よせそれバうの漁師どゝ云々ハ今あこを打所ふれバ暫く待べヽ各々方ハ何程投網の上手ゐても此佐久知穴の魚ハ一疋ゐてそ得る事うさヽ今ヽ我らが捕て得さするヽ程ヽ見物いたせべヽとりふそハ幸の事ふことてうづその昕へ舟をつふざ竹筒ヽ用意の酒あれバそと取出ヽおのれものミ漁師ゐをはたゝくれバ大ヽ悦び漁師ゐ弁當の内ヽ酢味噌あとそ

印旛沼全圖

田原
道路
驛市
村
分鄉
新田
名勝舊名

佐倉
印旛沼
新川
利根川
成田山
土屋
宝田
押畑
松崎
下福田
上福田
長沼
南羽鳥
竜角寺
北羽鳥
佐野
香取
真津
矢口
安西
滑賀
安食
下総
大竹
山口
酒々井
本佐倉
大佐倉
中川
飯田
鍋山
山崎
弥勒町
本町
魚町
新町
海上寺
将門山
平賀
吉高
松虫
下福
和泉屋
甚左衛門
下井
下総
北
西
東
南
四

飯の内よりも今捕ーイナ十十四五斗り取出ー細捕飾小刀ありて板
子の上ありて料理を予是を食するふ常の魚とハ支りりその
美味ある支いふべうらず一鉢紫ハとゝと直ふ死するのる一時の間も活置ことゝ叶ひ故ふ
川辺の者とりどる漁師ふらず八生ふる魚を食支りー
酒呑ふら漁師のいひるハ古の佐久知ふハ何処の漁場と
さだめあら称バ誰ゞ細打ても宜ーなれど手あれぬものふハ
一疋の魚もえゞゝー故ふ手馴ーその細打てその一細の魚を
得さもるゞもとよりの習ハーありと語ことさこの者とふハ年々夏ふ至れ
れハ昼夜のこゝろをそなれぎ漁業をゝこゝのふもとゝいひり
どりそうゝ舳先の方ふいてり程をうゞひあこを投ゝるふ
魚ハ細の龍頭の阿ー真白ふ集りてそゆこれをゝてこ称人々踊り
上りて賞賛ーぬさてこの一細の魚をのとらゞ我等ふあたへり
おのれいてくよろこび早速家ふ持りー数へて見ーふ一百二
三十斗有き魚の沢山集る支是あて知べし

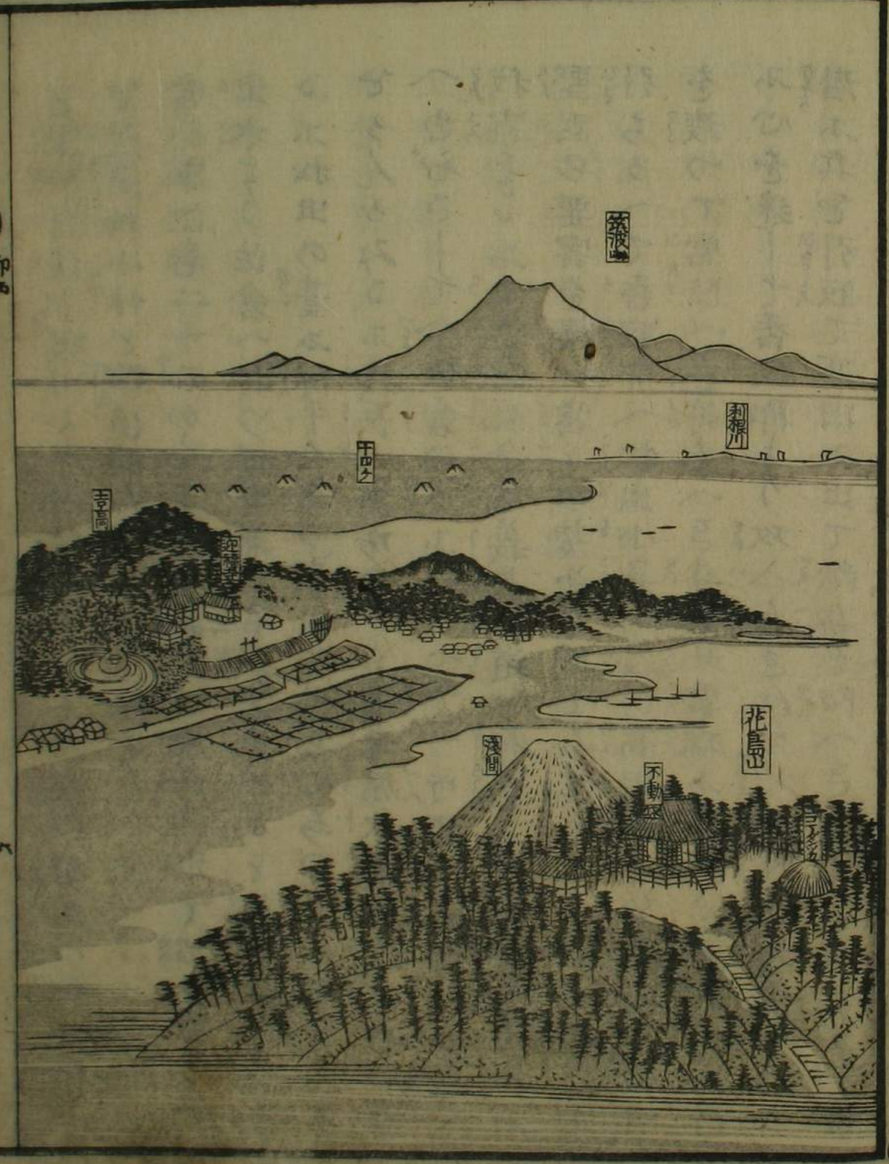
鳥見ヶ岳　印西萩原村ふあ鳥見大明神の社あり佐倉風土記
云ゝ所祭饒速日命相殿神御炊屋姫命味間見命也有永禄中之梁
簡元禄中社司石井氏請吉田兼敬卿奉正一位焉
常陸風土記云鳥見岳是ナリ

松蟲皇女廟　松虫村松蟲寺ふ有寺門の二王端慶作本尊七佛薬
師如来行基僧正作人皇四十五代聖武皇帝天平年中の御建立
といふ薬師堂の後ろの方ふ松虫皇女の墳ありその側ふ社あり
俚人姫宮と稱せ松虫姫ハ聖武天皇第三の皇女或ハ宮女とも云傳ふ癩
を病ゝてこゝふ棄らるゝ自らるゝーこゝ此薬師佛を祈りて愈支
を得ゆふ後帝都ふ還幸ーて褒ゞ給ふ而ーて後御骨を當山ふ
安置せといひ傳ふ

松蟲の陳場　松蟲村野の出口ふありさハ常州河内郡足高の城主
岡見中務少輔信貞の長臣栗林下總守義長佐倉の千葉を責ん

印幡沼圖
北鳥山より筑波山眺望

二妻戸
まくさるや
印幡の杜鶏
素丸



と軍勢を催し布川より利根川を渡し布佐の砦ふへ押への兵を置笠神小林と戦ひ而して此所ふ陣も
常總軍記巻二十云かくて義長兼ていへ瀬戸へ出て沼をめぐり出水より佐倉へ押つけ有無の合戦をもべーと号令せしめ々るふ松虫の墓ふ陣し人ちづつふ軍氣天文をうんぐみるふ義長大ふ打やーし海老原次郎を近付東の方へ回ぜさして今佐倉の方ふ打こつて一庁の赤氣西北ふ靄く我察さるふ千葉勝胤今度義長此道を押来る事を知て道筋ふ堅固の要害を構へ當手の勢ふ乎間とらせ日救を經る其内ふ引ちへて香取郡へ打出小見川及ひ高田松岸を越え利根川を渡つて常陸へ逆寄をへき斗策此雲瑞ふ歴然さを去ハ此所ふ心を迷して香取郡より攻入らきんふ以の外の大事成へー潜ふ兵を引取て高田ふ出て敵兵を防へきあを去ふぐら千葉

佐倉の様子を知を得ぐさしー左細作を出して是をさぐるとも雖ども今明ふらふ如何せんと思ふふ我今下筮して是を見るふ雷澤歸妹の卦也是味方ふよき助けの人来るべーふ尾張國小河の住人小河左馬次重知といふ者ハり彼ハ清和源氏の正統左馬頭満政の後胤ふして名家の末ありしう左知謀を兼備しいまだ年若うをなきを以て武者修行として関東へ下り上野下野を經て常陸の水戸ふ有を夫より千葉ふ来る其時ハ千葉も静うあをなれバ武をミがく事も遠ざうきり暫く足を止むべうりふるが千葉の老臣原式部小河を臣下とせんと二千石をふさふべーと也しーが小河が心ふ叶ハぐ陪臣と呼きん支本國の聞えもいうぐふりとと思ひ是を辞して東海道を上らんと思ひるが岡見の老臣遠藤又右衛門ハ相知きる者ふりしうハ今度義長といふ者を軍師として兵を千葉へ出そうー

ほとゝ聞くたとひ遠藤此軍中ゐならばとも知る人のよーこ
あれ尋問せざるも残り多ーいろ〳〵彼陳ゐ至らバ遠藤が安否
え知るべーと思ひーらバ印西へ渡る斯て義長が陳ゐ来りて
遠藤を尋〳〵ふ二の手ゝ大将とーて此陳ゐありくをを小河
大ゐよろこび對面ーてむらーく今の物語せーゞ遠藤志バらく
小河を止て義長さてハ味方ゐ吉瑞有と
見えーハ小河ゐらんと思ひ對面もべーと有なきバ小河も辞
をべきゐ祢バ遠藤と共ゐ義長ら本陳へ行て謁ーくるゐ
義長ハ小河ら姿を見るゐ其長六尺餘ゐーて年未ざ三十ゐた
らぬ勇猛并びふき男ふきハ頼もーく思ひ酒ゑんをふーて後
千葉ゝようをを尋〳〵ふ小河申くるハ千葉勝胤當時印幡郡
佐倉ゐ在城せり斯て其近郷盡く守衛を置たゞまち下總香取
郡を籏下とーて尤家臣を交へて堅む滑川ゐ織田尤京助崎ゐ

内田信濃寺臺ゐ貝室加賀大舎ゐ二条大内蔵小見川ゐ栗飯原
尤衛門小見川越前守千葉東郡ハ一圓ゐ東の六郎是又隨一の
連枝ふーて強勢の者ゑゞ其上六郎大力ゑらびなく早業の名
誉荒馬乘ふーて大太刀を得たゞ弓ハ麥の揚由を欺き大剛ゐ
ーて元をふつけ寔ゐ大將の器ゐる事千葉ゐ肩をふ〳〵ぶる者
更ゐふーゐ又米の井ハ木村能登吉沼ハ地涌監物長沼ハ大野修
理原坂ハ平外記荒海ゐハ荒海尤衛門大竹ゐ大竹次郎兵衛飯
岡ゐ飯岡勘解由馬加ゐ馬加七郎船橋ゐ布施五郎鷲沼ゐ木村
十太夫大須賀ゐ大須賀四郎是勝胤が圓城寺ゐ村田筑後圓城
寺備前村田臺ゐ村田兵衛山部ゐ山部八郎尤衛門森戸ゐハ森
戸五郎宮戸ゐ宮本若狭川村ゐ川村大炊岩尾崎ゐ只越美濃神
崎ゐ大和太郎尤衛門出水ゐ大谷半尤衛門藤崎ゐ藤崎隼人同
四郎尤衛門飯高ゐ飯高播磨同十郎鏑木ゐ鏑木日向同次郎尤

衛門。櫻井ふ櫻井式部神大寺原ふ石上外記。石橋ふ石橋大膳。同
若狹。小石橋ふ伊藤平次右衛門。同與市郎高井灘ふ大野弥左衛
門。吹上ふ風間平右衛門。同平十郎。一分目ふ高野内匠。二分目ふ
分目同人ふり。木梨ふ木梨内匠。同善左衛門。森本ふ森本平太夫。
廣岡ふ廣岡縫殿。青木ふ青木土佐。伊能尾ふ伊能尾越前。同勘解
由。同四郎右衛門。伊能尾山ふ山崎主祝。金田ふ金田刑部。神々廻
ふ神々廻丹波。惣深ふ惣深六弥。林ふ林飛弾。鳥井ふ八鳥井筑後
同惣右衛門。其外藤田對馬同縫殿之介。武田右近。芝田宇右衛門。
久古主斗。秋山内記。中野ふ八遠藤左兵衛。布鎌ふ布鎌但馬。九岡
喜一。同彦市。垣生ふ垣生大和。迎瑳ふ迎瑳四郎。宇津野又市。宮小
四郎同圖書。臼井ふ臼井次郎。成田ふ成田八郎。天野弥太夫。長澤
ふ小舍入道同次郎右衛門。秋山藏人。佐原ふ木内八郎左衛門。高
橋藤兵衛。小野傳八。竹川圖書。飯田新八郎。松崎久内。推名ふ推名

丹後。岡野内膳。澤田五郎左衛門。高橋弥八。竹内兵部。羽川四郎左
衛門。田口ふ八田口刑部。其外あけて筆へ難ー又香取郡の多古
高岡ふ舍弟千葉頼胤あ。生實より北ハ千葉の内ふして老臣
原式部在城せりまゝ安食ふハ松田藤右衛門。大竹ふ大竹平次
左衛門。萩原ふ萩原登弥太。吉高ふ吉高代々。吉橋ふ吉橋中務。笹
川石見。其外松岸本庄高田以下そくて其數五十八城八十八館
ゐ九十三餘ゐり然るふ今度香取郡ふ出張して高田を渡り直
ふ利根川を越て常陸ふ働くべき評定の候なりまゝバ此河ふ
陳ー給いん事詮ふらるべー若利根川を渡ー常陸へ乱入せバ
脇を咬とも甲斐あるまゝ今度香取出張の主将ハ彼東六郎鎮
胤を以て惣轄とー二条大蔵太夫鳥居筑後。村田兵衛次将とー
て一万餘騎差到ふ。中畧御評定はりていそき高田へ陳をう
つされ然るべき哉と申なり。義長聞てさらそ有べーられ昨夜

天文を考へ尚よく雲氣を見るに赤氣西北をつらぬく。こは其さざー也。又ト筮せーむるに味方ふたそけあるべき卦を得たり。是貴客の物語を聞べき善卦あり。今ハ疑べくもあらねどもみやう下略

吉高代々城跡　吉高よあり掛鳧といふ山の上ふもと。東ハ印幡江を眼下ふ見おろし風景至て美あり。西ふ御門坂あり。南ふ家老内和田屋舗ふど云地名今猶存せ。其外口と唱ふる地名甚多ー和田口南口西口北口丑口坂口野口向口向路口城田口殿田口向田口鷺巻口馬草田口等あり。北ふ船戸南ふ薙田河岸あり　是より北須賀へ安能橋ハ山田村へ行堤の中程ふあり

吉高鮒　名物ふもと。金色ふして骨堅ー。肉ふまりて味美ふあり。冬の漁まづ一人小舟ふ乗此鮒をとるふ一種の漁葉あり。水淺き所を掉さーふぐら舟を踏て舟を左右へ搖ぶのの浪音ふおどろきて鮒ハ藻の根ふ隠る。その水中の濁るを見て手ふて是を握ことる。故ふてどぢ鮒とものいふ。萬葉集のモブシツカブナ是ふりツカハ握の義ふり

カハボタル　俚言ふカハボタルといふもそれあもと。亡者の陰火ふる由。形ちもくーて大さ蹴鞠の如く光りハ蛍火の色ふ似たり。夏秋の夜あらわるる雨の夜ハ至て多ー水上一二尺離れていくつも出て遊行そるが如ー。或ハ聚り或ハ散ー又ハ高くまた低くそーる時ハ矢のごとしー。久雨の節ハ夜ふく多く是をみるにまた花嶋山へ龍燈の上ることなりさく陰火龍燈のたぐひ種々の書ふ多く見ゆきど。詳ふるハ春暉ダ見るとく西遊記ふあるーある筑紫のちらぬ火ぞさ越後國新道村飯塚氏の咄ーを牧之老人雪譜ふ出したる。頸城郡米山の竜燈ふをふ又一奇説を擧ぐ。義和壮年の頃印幡江の邊ふ吉高和名抄ふ云印播郡吉高ふあもとーと紀頃ハ五

月の未ふセーう朋友来りて云そるやう。今宵ハそらもそきて
いと静ふれバ慰ふ釣に行べーといひそるゆゑやも幸の事
ふるとと思ひ早速仕度さ〳〵の〳〵二人連立河岸ふ行手ふく〳〵小
舟ふうち乗江の半ふ至り朋友の舟と十間をうり隔て掉つき
立舟を繋ぎ釣をたれて居ありそふ寂早子刻ともおぼーしき
頃俄ふ空ゝき曇已。朦朧とーて物さびーく程ふく大風吹起り。
雨降いだーし誠ふもんの闇とふり十間斗をそるれ居ある朋友
の舟も見えだなりぬおいぶこうーと思ふ内巡ふ遠水中より
一つの青き火閃々と数あつちぬ是ふんゝの亡者のカバボタル
んと見居たるふだんくとそふ方ふ近付来りぬ。逃うくらんと思
へとも風たよなきバ舟を動ゝまを事もふらんだ。衣服ハぬきて戦
慄をるふ心をもづ免朋友と呼んとををど更ふ声も出ぞ。何如ゞハ
せんとたそらふ内ガハボタルハとゞがふねの舳さきふ来たて

おハうふハートと思へどもを庵きやうなくだ〳〵目をとぢて一心
ふ念仏をるのくふると。暫して雨やゝ風えちと静まりぬれハおい
ぐくと目ぜ開さそそふ。そやカハボタルハ何處へゝ消うせ空
も少し晴て朋友の舟そとの處ふ居あり。これとそたそーえて
ゑといざー。今のカハボタル残見ーやと問へバ我もみたれ共
おそろーさふ物も云りんと答ふ。やう〳〵人心地付て早々我家
ふくり来りぬ翌朝漁師とも大勢居たる所ふて右の咄ーをく
そーく物語せーふ猟師ども云くるハ。其くらゐの事ハ度々の
事ふり。我ハ一昨夜漁ふ出ーふ彼カハボタル我ゝ舟ふ乗なり
其時ハ大勢ゆゑおそろーとも思りんだ。舟掉を以てからふ任せ
打ゐゝさー所砕け散て舟一面ふ火とふりて塗付ゐる如くその
鯉さ支壁ふ庵さ物ふー。其質油ゐ如く阿膠の如くぬるゝくゐゝ
くとーて落ぞ。みゐく打寄りやうくと洗ひ落ーぬと大勢の

物語なり。又其内一人の云ふやう。四五年以前の夏ふるが或夜投網うち打艫潜ふ出し所彼カハボタルいくつともふくく出來り舟近くふいくと飛めぐる。網とりハ剛氣の男ゆゑ此時小声ふて我ふさと一々射を我もうふふさながら舟残廻らしうのカハボタル残追うけまわす。網ぐりハあらを小脇ふ引うう〳〵舟の舳さきふ突立あぐり。手頃を見さだめ投々きび按ふたがうびカハボタル一ツ残打かぶせぬ。其時え腥き臭いそん方ふく。網の中ハ一面ふ青光火とありぬるくして落次。いかんとも吐べきやうなく手ふてえみ洗ひそゝぐ共ハ其手二三日え腥かりし故。一昨夜も大勢ふて舟残洗ひしが我ハ以前ありて居しゆゑそまと云次手残舟ざりしとひく大ふ笑ひぬ。のカハボタルといふそれを生捕てその形質残あらハ右ハ印播江の猟師ふるべし

花嶋山　印幡江の中ふあり。平賀村ふ属す。俗訛撰ス離島篇ニ此島へ舟ふて渡り。由云傳ふきど。今ハ田畑とふれり。島の廻り一里といへり。此絶頂ふむろ。寺あり。天日本寺といふ。今ハ不動堂と篭り堂のこ残まり。弘法大師護摩修行の古跡ふもとて護摩檀塚獨鈷水東の方山のなど今ふ存在せり。山ふ十六峯八谷ありと云。さて此山ふ登きび西ふハ富士南ふハ佐倉の城山将門山東ふ當りて成田山北を望めい筑波日光の山々やゝさ北須賀村水神の洲嵜ハ。江の半ふ蛾眉をふ一往来の高瀬舟ハ白帆ふ楊てへ方ふ乘ちがへ。數萬の漁舟ハ柳葉ふちらそがごとく千騰万景應接せるふ遑あらび。誠ふ北總第一の勝地ふるべし

潮ハ波うねり〳〵ハ蕎麥の花　梅塵

雨祈　文政初の頃印西の邊ふ名を卜童と呼。禪宗の僧あり。年十九歳ふりといへり。元來何きの帛子ふり有りんこふ漂泊し来り

て二三年ふ成ぬ。其性いとろて愚鈍みて常ふ道路ふ嘯唄ひ宿を需めず。稠下祠堂を揣とも。三伏の暑月みる綿入ぬのこと着て暑ー
とせど蚤蚊といと多。嚴冬素雪の寒さ夜も草物ふ半天一衣尤麻の破
き衣ハ常ふ腰ふなどひて放さを食を與ふるふ二椀の外を食
らひど二椀食ーて後ハいろ〳〵ある珎味を出もとも更ふ手ふざれ
取らど酒宴の席を嫌ひ又小童壯年のその徒らふを煙草ふ
火藥を交せ食物ふ蕃椒を混ト戲ふ是をあたへ困ゑまーむる
ど故なりとそ飲食の外一物をもハざるハ實ふ愚直の者と
云べー。或年の夏此あたり大旱ーて利根川を初め所々の江沼
も涸水高瀬船の通路も絶え井の水はさて。國民の憂へ大うた
ふーど。是ふ依て地頭領主ト仰もも諸寺諸山ふ仰せて祈らせられ
村々の農民も種々の事をふーて雫ゑるが其驗ふー時ふろ
ずト童云るハ印幡江の中ふる佐久知宂ふ竜神住もとき是

を頼ミ祈ともふり忽ち雨降庵ーと早々墓と作りてそさせよと云。
所の者ども大ふ笑ひ。この魯鈍ある乞食坊主何事哉知そうハ
る虚言を申出ー人の心を欺くなーんと叱りられべゆへ〳〵
疑ふ支ふらき我數年々の竜神と友たり。依て竜神をたのむの
法哉知きりと更ふ聞入きぎ。此事強て望ミられべ所の者共え
長々の早魃ふて困ー果たるをりふれべ。まづ彼が意ふ任庵ー
とてト童が言葉ふ隨ひ。佐久知宂の傍ら江の中らふ墓残作ゑ
てあたへぬト童是ふ注連を張り四方ふ青白赤黒の幣残建種
々の物を備へさくト童らの墓ふ上り突立あぐと高声ふ云々るハ。
此度天災大早魃ふて國民の飢渇見るに忍びぎ是ふ依て愚僧
ト童一七日の間飲食絶断禁ー佐久知宂の竜神ふ祈る希くハ
大雨を下ー衆人の飢渇を救ハ名ゑよ。若七日ふ及んで雨降ら
ぜんバ愚僧再び生て歸らど。佐久知宂へ身残投ト竜神の栖残

織さんと云早てどつうと座しそのとも云うべ座禪の躰ふそ
見えふそる。所の者共是までい欺むりると思ひ居たるがこの
誓文我聞よりも大ふ驚き皆々あんとくらしてゐたるなり。偖
ト童零我初名しより〳〵ふそで七日ふ及びしれどもあるしえこゝそべ。
〳〵ふこゝト童が死る日ふきと皆〳〵案ど煩〳〵る所うのト童へ國の憂
民の苦難我救いんと命を懸ての祈をふきべその至誠の感ふ
や有〳〵ん其日午刻より俄ふ黒雲舞起り雨降出し追々篠をはく如く車
軸を流してふるふふりしれば所此その共大に悦び長〳〵の飢渇の苦
しみ今一時ふ蘇生しなる心地ふりとて踊り上つてよろこびあくり。
夫よりのト童へ何をう恩賞そべきと相談せしう元より無欲の僧ふして金銭へ手ふだも取らず二椀の食を乞のみふて心ふ望べきやうふく只物一衣ふ麻の衣と謝しれば斯てト童へ五七日たび逗留しれりと斯て此邊を漂流せしが。それより何地へ行るうらん曽て眼ふ掛らぞ所ことのどもふ甚だ奇ふりとして疑はざるものふあり

瀬戸渡　土浮瀬戸の間ふあり佐倉風土記ふ水上三百九十丈と有
同書関宿路の條ふ在佐倉乾驛十佐倉至瀬戸八里此間有土浮滝至木下六里木下至布川六百歩瀬戸至荒野六里荒野至滝九里基宿守谷七里此間有利根川布川至小文間一歩谷岩井百戸而達関宿一行

印西産物

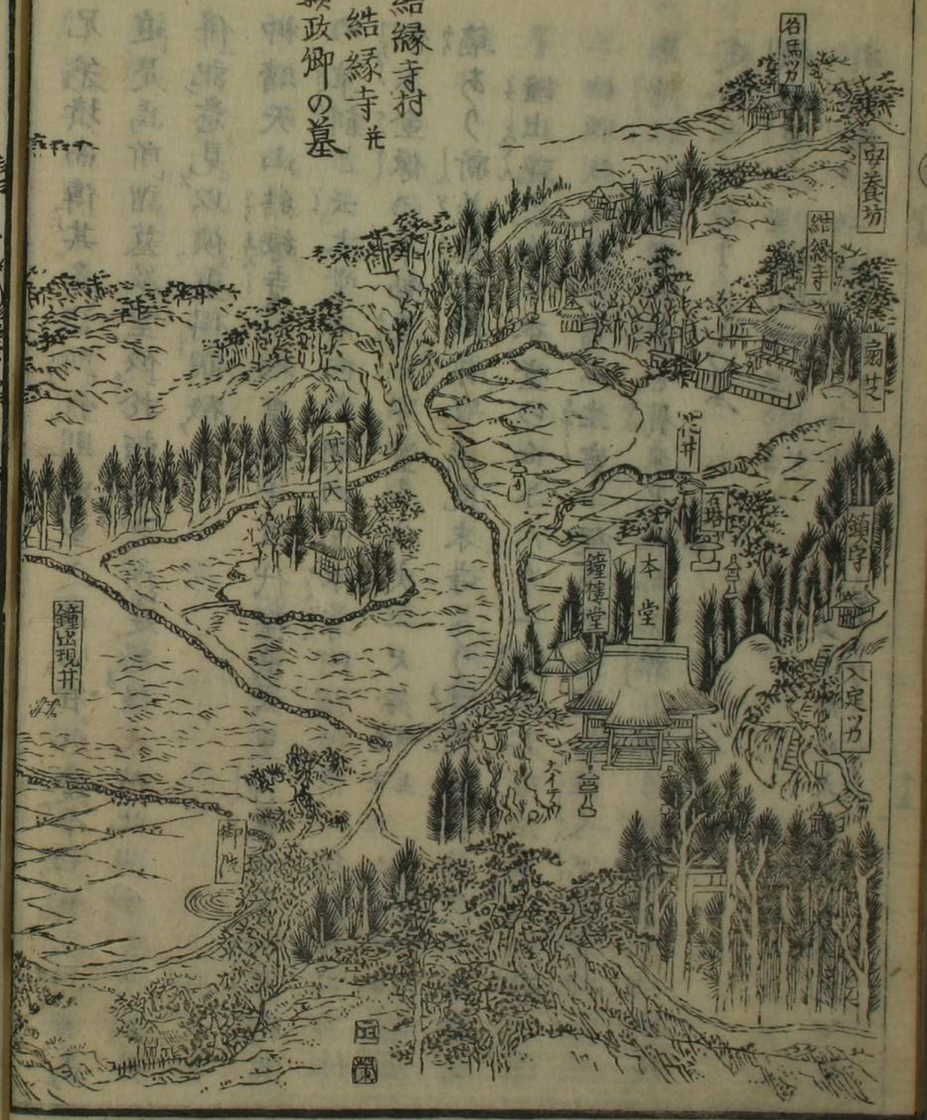
筍　蕨　茨苓所々出刺古松陰土壌生之狀如彈丸外褐色内皆香松露所々在馬先以白鍉初蕈所々出種味美氣如松蕈或曰陳仁玉菌譜所謂麥蕈者是也未詳是否松露ふ二種あり米松露と云ふ色白くして柔ふりと栗松露といふ色黄嵐を帯て堅しー是下品ふりと又二十年以前までハ猪鹿兎ふど甚だ多うりしが近年一疋そこそこるとふし

師戸渡　師戸臼井の間ふあり佐倉風土記ふ水上三百九十丈とそ

巌戸　岩戸村ふあり佐倉風土記云距佐倉西北八里六丁一り岩戸五郎亂安居之志津亂氏攻之家族皆死後頻有鬼哭燐火之怪臼

井圓應寺僧誦經止之因建寺今西福寺即是而其堂前紅梅則記
亂安父子及妻所自殺處云東國戰記所謂岩戸城主岩戸五郎與
吉田渡　吉田より保品へ渡る米木茅田を經大和田新田
源賴政塚　結緑寺村にあり佐倉風土記云傳治兼之亂賴政敗死
于山城宇治遺命於其家士唱競二人曰負吾頭牽吾馬向東國去
吾欲止處當重心塵其地期以五旬過期而無驗則乘之二十奉囑
東行二十日而至此覚甚重遂座封之植狗骨樹且建堂二十俱爲
僧居此既而馬斃埋之栽櫻號名馬塚又有雜墳在桑橋墓距家南
此亦賴政所畜來此而漬云按唱競東去不見于平家物語盛衰記
等但賴政首座于下總舛古河在口碑而事似此所傳然不審孰是
焉更有一說賴政矛深栖三郎光重其子陵助賴重共居下總九郎
義經小年來此俟金賣橋次而往陸奥國事見于平治物語而橋次
所寄之佛具在隣村瀧村瀧水寺又近村中根濱印播江處有橋次
兄矛墳而傳其爲盜所殺則賴重之居必在此邊今曰御所柵者蓋
近是焉所謂墓及堂似於賴重之所建恐後人彼此附會爲之說耳
併記意見以俟重得明徵矣
柳晴天山結緣寺八人皇四十五代聖武天皇神龜年中行基僧正
の草創と云本堂南向六間四面本尊阿彌陀佛八行基僧正の作
側ふ金像の不動尊を安置云御丈二尺餘嘉元元年九月十五日願主雜律師瀧尊と云
鐮あり新義眞言臼井實藏院末寺なり境内ふ花井戸扇の芝あ
り鐘出現の池い本堂の向ふあり一說ふ其後治兼の兵乱ふ源
三位賴政平家の爲ふ生害一從臣下總國の住人下河邊村藤三
郎清恒と云者御首を貰來り此所ふ葬り奉り剃髪して一宇を
建給仕一なりふといふ
賴政塚　本堂より辰巳の方三丁斗山の上ふ有
名馬塚　本堂より未の方二丁斗ふあり櫻の大木有て道路を覆
とさねこげをとゝめ

結縁寺村
結縁寺并
頼政卿の墓



入定塚　本堂の側ふあり傳伊勢国住人佐藤民部といふ者の娘頼政公の墓を尋ね此所ふ来入定せしと云石碑ふ大比丘尼善智入定伊勢国の住人口口口娘大永六丙戌年二月十八日享保九年造立と見也

頼政石塔　本堂より左り少し奥の方ふあり高四尺余五輪文字磨滅して不分云傳ふ正保の頃井上筑後奏進らきこゑありと

昔此寺ふ六坊あり今其地名残まり　安養坊　住持坊　山中坊　瀧本坊　大仙坊　鷲見坊　古く施本坊と云ふ由治兼の頃斯改とふ

天正の頃當山焼失して寺寶縁起残らず灰燼せしといふ

又云此里へ往古京都の官流飯岡豊後守尊經といふもの天平年中此里ふ来り開發せし地也と云飯岡家今猶存す

神崇橋　印幡郡舩尾村より千葉郡佐山村へ架せ印幡江へ此所ふて盡橋より上へハ高瀬舩通せぞ是より利根川落口安食まで七里佐倉の鹿嶋橋まて四里半とぞ

○是ヨリ印南

平戸搆　平戸神村の間ふ架そ是より検見川海迫堀割開發

天明五乙巳年四月の古繪圖ふ平戸橋より検見川海まて堀割長九千六百廿六間四尺五寸床六間深三尺より六尺三尺七寸まて新開反別三千百十三町五反一歩余と見ゆ今ハ田沼侍従の此事を與りて堀しめ給ひぬきど終ふ事ふらずして止みぬ其後また天保十四癸卯年水野虔五家の大名ふ命じて七月廿三日より鍬初して堀しめさきど事ふらずして同閏九月二十三日ふ止さり

米本城跡　米本村ふあり佐倉風土記云距佐倉西南三十里六丁一里

村上氏世據之永禄元年三月十三日城主民部大輔綱清自殺而城廢焉

村上綱清墓　米本の長福寺ふあり綱清ハ民部大輔ふり天文弘治の間米本の城主たり永禄元年三月十三日自殺を同書

臼井城跡　臼井宿の墓ふあり。佐倉より一里餘西北の方あり。予一日臼井なる大川源五右エ門書成の許を訪ひて臼井の城跡を問ふ書成筆をとりて今の有様を図して予ふ示す則ち是を北齋ふ縮図ふさ〳〵めて尤ふ出来ゆゑ同所四應寺ふ傳ふる舊記を見せらる用を摘で爰ふ出す

臼井元祖傳

千葉介常兼分付三男常康于數箇之庄園（角一来、飯重、井庭、羽鳥、亀黒田、生谷、物井、下志津、上志津、上座、小竹、井野、青葛、先崎）爲臼井城主因之號臼井六郎次于千葉介上總介之大族也此臼井城也者前廣野湖水漫々後湖水漫々左右谷廣而深山繚而曲其雖尽人力豈如是堅固哉有利自守無使敵攻南望生谷之（小保貝林名）松呈千年瑞北頽印幡波傳萬歳之響城郭周迴三里餘印西隔水一里許誠是名城也勝地也常康奉仕于頼朝公有勲功頼朝公爲大庭敗軍憑于葉到下總常胤將一族以

相從時常康嫡子常忠（太郎）孫子與一等率騎兵三百與常胤同相從爾來前爲追討平家粉骨于西海爲征伐蒼衡砕身于東國常胤有大功於頼朝公偏是一族合力故也頼朝公於常胤其愛敬世之所知也其恩顧不淺故餘威遍親族但恨雖其有功労者被書干葉一族而不見記各自之名譽不遠聞芳壱無久傳自常康至祐胤（四郎）凡五世相續爲臼井城主奉仕于將軍家者也

臼井正統中絶記

正和三年秋祐胤不幸臥病醫治失術禱祀無驗八月七日卒去歳僅二十五唯有一息一號竹若丸成長之間胤氏（祐胤之弟也爲志津城主（志津次郎）代之行法令憐士撫民須如我在日胤氏始雖守兄之遺命欲情已生義心忽亡未過一歳私謀殺竹若丸自爲臼井城主家臣有岩戸五郎胤安（岩戸村名有印西胤安居之故号岩戸五）臥側聞之已欲殺前夜自爲山伏之形藏竹若丸笈中潜逃去當此

日比谷古城圖　大川源吾門人書成製

本丸ヨリ
子　沼向　岩戸　三十丁　北齋繪圖
丑　同　鎌苅　一里　師戸　廿丁
寅　同　瀬戸　一里半　土浮　一里
卯　飯野　廿五丁
辰　佐倉　一里余
巳　飯重　廿五丁
午　生谷　廿丁　千葉　四里半
未　下志津　廿五丁
申　上志津　一里
酉　上座　十八丁
戌　小竹　十三丁　戌亥ノ方　沼ノ上也
亥　吉田　一里半　松崎　二里　平戸橋迄二里半

印幡沼

大神宮

江戸

時亂安禱爾于妙見菩薩願其無恙然後又潛出岩戸然後又潛出岩戸奏歸命君直詣于建長寺偏賴佛國禪師約成長之後令之爲禪師具聞其由愛憐養育如父於子漸長而後禪師不欲令之爲禪足出於恤孤之有實遂使之元服號左近行亂時告訴基時負時等欲令歸本領之地雖然天未命數事終不成禪師示寂預謂弟子佛真禪師曰願續我志扶持行亂因其遺教佛真禪師亦恩顧厚不異佛國禪師行亂掌辛味君送春迎秋空終二十餘年至此時歷世之文書皆亡累代之珍器悉失是幼爲孤且過禍故也

臼井中興記

建武二年秋足利尊氏奉詔追討時行下向于関東相戰十餘度時行敗北不知所之其後尊氏兵威重歷八州関東之武士皆屬之尊氏自稱征夷大將軍奏討義貞義貞亦奏尊氏有逆心依之京都邊騷動時佛真禪師與行亂相議曰尊氏卿者必主天下之器也此度相從以抽軍忠可達著錦帰之望於是行亂將精兵五騎而屬于尊氏卿其費用咸出于建長寺一山與佛真師之扶助且自首途日於建長寺一山緇侶相集毎朝誦尊勝陀羅尼百遍以祈行亂有戰功而遲本領地其功徳豈徒然乎然後延元元年二月尊氏卿攝玆豊嶋合戰失利敗走赴于筑紫菊池武俊率九玆之兵於筑前國多々羅濱與尊氏卿對陳尊氏卿曰敵軍衆而強我兵寡而疲自運命今日已窮矣於是行亂以爲吾扶戰功遂素志正當今日戰場也不是因神力何能之乎敬忩我家守護神且禱之宇佐八幡及宰府天神自誓曰若功不成則使我速戰死生而何爲主從六騎直先登大破菊池軍其勢絕比倫所謂如以礪投卵豈是人爲實知神助菊池敗比而後九州怕其兵威悉屬于尊氏卿其感悦不少乃約行亂云我脫今日之危難偏在行亂之忠功後來天下歸掌中一日再歸本領地

謝之其誓約不可變也天下已定之後曆應元年秋尊氏卿舉行亂任從五位下行左近將監爲臼井城主歸賜世所領之地且有可改行亂爲興亂之嚴命言是取再興廢家之義也又命千葉介貞胤曰速可使亂氏志津退去而守爲臣之禮義嗚呼天運無不復興亂再爲臼井城主其昌榮又如昔時謂之臼井中興也

圓應寺草創記并八幡宮大神祠造營

興亂再爲臼井城主而後自心以爲我中興之功成者元是佛國禪師之撫育佛真禪師之扶助也其恩之不可忘也不唯是我永至子孫亦猶可追憶於是招請佛真禪師住持于豆州國清寺以爲開山新立精舍山號瑞湖寺名圓應且寄附領地十分之一興亂事佛真禪師恰如子之於父晨省昏定所謂能竭其力者也寺與城隅一池爲之橋使其往來有使也又預自心期我若生子以其長先爲僧嗣法佛真禪師併是欲謝恩之有餘也道菴和尚傳云興亂之長子曆應二年己卯十月二十四日誕生

（小）爲僧法嗣佛真禪師爲圓應寺（二）世道菴和尚則是也

奉勸請宇佐八幡宮及宰府天神于臼井長致報賽八幡宮有城南其山号八幡山其寺号滿嚴寺以爲別當令掌神事八月十五日有祭禮也興亂初相地于此時自以所攫之楠樹枝撓地曰若此楠樹活而生葉以爲靈神來格之證然後其樹繁茂碩（今神前有是周り三丈斗）嗚呼其妙不可測也又於城中草創菅神祠修覆妙見堂以八月二十五日祭菅神以七月二十二日祭妙見自致如在之禮矣想夫興亂之爲人也其誠能感二神其勇忽挫三軍幸雖爲中興之祖自處富貴長記爲郎當之身佗恤寒饑大抵以數件支平生之志行其可祭也

（此外舊記雖多ク悉ク繁ク以ク墨之）諸国圭齋録下總国禪宗ふ二十石印蟠龍臼井御圓應寺

大楠樹　右古城跡の内西北の隅ふある側ふ山王權現を祭る楠の周圍五大餘ぞ〻東の方へ九尺斗り隔てめぐりて一丈ぞりありげ二本あり枝の根付たる物ありと云り其奇ある支図を見て知べし

臼井
大樟圖
周圍五丈餘
東方一丈餘

むらし此撞のもとふ大蛇住て折々人を捕食ふ何人の退治一たりとらん其大蛇の皮ありとて方二三尺斗ありて鱗ハ四文銭程ある故同所の寶蔵寺傳へ持り予も見はなしく尋よしが如何したりとらん近頃ハ見せぬと云り

大田圖書墓　臼井圓應寺の西古城跡ふあり舊記云備前守俊胤前為臼井城主時文明十一年己亥正月十八日太田道灌江戸城主將二階堂七黨等一萬餘騎兵渡市川來臼井圍城俊胤預聞知之故設備侍馬千葉介孝胤引援兵來共守之道灌良將也俊胤亦良將也彼此盡計畧攻守爭戰功相戰十餘度勝敗未決春過秋來長尾之麾下數國之武士來共援守七月十五日大戰道灌之兵伏尸數百騎太田圖書戰死道灌猶力攻軍失利敗北（太田圖書墓有臼井地也里民有疾疫則祈之無不應也夫生有勇力者死有神力者是自是俊胤声名高世間威風奮於國中者也

おさつ屋　古城跡より東南の方一町斗行てまて田の中ふ石の小祠あり（古い此邊をさる芦原ありと云里人おらりさゝやといふ咳の出る人ふ此祠ふ焦撥とふ茶を奉りて祈念をゝび奇妙ふ治るといへり）その故ハ正和三年當城主臼井祐胤八月七日不幸ふして病死せ年二十五子息竹若丸僅ふ三歳祐胤の弟胤氏（志津城主）遺言ふよつて竹若丸の後見とふる胤氏始めハ兄の遺言を守るといくども忽ち逆心を生じ私ふ竹若丸を殺してミづから臼井の城主とふらん事を謀るゝふおさつといくる下女ありてやくも此支を知りて岩戸五郎胤安（卯西岩戸城主）ふ告ぐ胤安大ふ驚き自ら山伏の姿ふつくり竹若丸を笈の中ふ藏し潜ふ逃まて鎌倉ふ去り建長寺佛國禪師ふ養育を頼み生長の後本領の地ふ歸らんと欲そのち足利尊氏ふ届して本領安堵せし臼井左近將監興胤といひしハあの竹若丸の支ありさて臼井の城あそい

下女のおたつ後見亂氏の密謀殘岩戸五郎ホ告なる支顯へれ
ーも名亂氏大ホ怒り已ホおさり殺さんとはおさり危くも
その場をのがれ私ホ城をぬけ出印幡江のそとりある芦原の
中ホ隱る亂氏あとを追ひけ捜ーもとむまども曽てえざれば此時
おさり誤て咳をきさりーばと亂氏ホ見付らき直ホ首と討き
ーとあり里人甚く是をあはれみ其所へ石の祠を建てあきと
おさりさぬといふおさり咳をもそやう也とりもて
念願りあふ支そ
臼井八景 并序

下總國臼井ノ郷瑞湖山圓應禪寺者中興城主平行亂有故所草創
之精舍也境地靈景色絶後員古城喬木脩竹圍遶前抱湖水閑鷗
浴息浮游晴好雨奇之有餘日涉夜遊不飽若試謂之趣東望飯野
霽雪西映舊基夕陽浮萍斷金玉流瀬戸挂影晴嵐吹琴響洲崎
松聲光勝疎鐘報暮諸戸片帆促飯汐平水淺旅雁下遠部秋夜靜
雨暝漁翁繫舟戸岸加馬春待花木曙隻納竹陰涼遷喬鳥若嶺蟬
秋愛楓林酒冬和樵路之歌曠野蛩寒汀驚大凡四時之佳興一日
之眺望變態萬千不遑枚舉者也僕投老于寺前濯懐于湖水已五
年于茲矣寺之僧的公者方外舊識也乘興共消日於吟境訪殿復
終夜燈前問遺世之樂大且無窮公常恨言此多景地無詩人之詩
無歌人之歌者何其闕乎若不補之風流之罪也歟於是遂賦八景
以示之一唱則如坐夫勝地信所謂有聲之畫也後見此什人不可
無詩不可無歌公曰請僕亦題之見義豈黙止漫綴詩歌以附佳作
之後自顧東施顰也寫要餌蝦蟹一啖不可食者以釣金鱗所願在
焉時

元禄十一年十一月晦日

臼井隱士　信齋叙

瀬戸秋月

遠部落雁

夕照帰帆

洲崎晴嵐

城郭夕陽

舟人夜雨

舟戸夜雨　　宋的

夜雨蕭々舟戸天。深泥封路接平田。青燈耿々漁窓外。幾許浴鳧喧水邊

漁村暮雪　　信齋

遠部落鴈

乱行飛雁落田疇。蘆葉半凋遠部秋。貪稈稻粱欲充饑沙頭倦翼且踟躕

手折芙蓉折芙蓉贈遠人

飯野暮雪　　宋的

一丘突兀氣蕭森。冬嶺青松半落陰瓊屑紛々暮日。暮玉龍忽見偏波心

烟り猶る雪も夕べ旅ごゝろ

師戸歸帆　　宋的

布帆一幅迎清灣。萬頃煙波往亦還。澄潭面風休如鑄。鏡影今翠儻清

前山

そら人の住みし浪も紅葉の

瀬戸秋月　　信齋

晴湖漂影月如流。殘漏惜光人倚樓。瀬戸清風今夜景。吹嘘我嘯洞庭秋

そろ〳〵寒の湖もかくやらん　ま白に冴えし浦の月うけ

城嶺夕照　　宋的

空見平湖與攢峰。昔年層閣總無蹤。孤城返照紅將斂。近市浮烟翠且重

ゆく〳〵旅人ふりさけ見れば　いく重山

光勝晩鐘

一遍宗風已儼然。星霜五百有餘年。鐘聲遥響孤雲外。知是稱名落

日前
なふそ雲ぬあハ秋霧せ絶ふる寺孔浮ねむりれ音に啼ゑらん
洲崎晴嵐
掃盡江山絶嵐霜朝來子細見洲嵜驟翅鷗驚平沙上交葉蒹葭淺水濱
ふき拂ひ雲そ嵐のあらてふ波ふ立ぬ沙ふ鷗の驚くふ

跋

大凡有名無實者異方景物也茲吾蘭若門外瑞湖者不減瀟湘之佳趣而永超洞庭之逸興矣然今古東夷之境而冠盖無題艷志縮素靡伸雅情故富景不富句貧吟不貧興嗟乎盖有實無名者乎此故與信齋徵君緝録逸餘稗補闕漏而製作積而俱成於燈前之一軸皆是翰林壬人子黒之客卿不可得緘默者也爲時
元禄戊寅之冬
盲亀子 爲之跋

鹿嶋橋 甫來より佐倉田町へ架もがし川といふ。物井川の下流ふしてて。是よりて東一里餘ホーて印播江ふ入る
物井川 佐倉風土記云。在印幡郡二源皆出上總國一自野呂来歷田谷當北流十餘里而至坂戸一自吉倉来歷大谷流用草七曲巖富西流十餘里而至坂戸二水相會入馬渡橋下又西北流六里爲物井川出于小名木細流過鹿渡亦會于此而北流三里至羽鳥又與高崎川會遂北流於城西過鹿嶋橋六七里而入印播江
高崎川 同書云二源一出於文違高松之間西流過下勝田橋下十許里歷高崎南一出立沢南西流過飯積橋下坤流十餘里過高崎北二水會于高崎西又西流過高岡歷真田橋下流于城南會于物井川俱入江
佐倉 印播郡ふり入口ふ鹿嶋橋あり。橋と渡りて田町ふ入る。田町の中程右の方ふ田町御門こも。海隣寺坂戔上まハ海隣寺充

木より至る此所武家町ふと。横町より右へ曲り新町脊町弥勒町本町本佐倉町とへて酒々井ふ至る。是より中川筋過て成田よ達そ

佐倉風土記云城在印播郡之中而稍近西（舊曰鹿嶋山）其爲形勢居高陽隰原濕阻要屏翳足乎遠通面卯背酉左右子午前置市廛曰田町曰新町曰彌勒町曰本佐倉町曰酒々井町是曰佐倉六町（一町凡八百有八尺一江戸七十九里東南至常陸国界四十二里東北至下野国界五十四里西北至武蔵国界七十二里六丁一里）同　文略　昔千葉介平常胤ヲ輔胤城ヲ佐倉郷將門山ニ移ス其後胤富相鹿嶋山之要阨使邦胤移城于此築營未成邦胤卒其子重胤幼沖天正十八年與北條氏共敗于相模國小田原城東照大神祖賞鹿嶋山之形勝遂命利勝（土井城）之慶長十六年春正月十一日興功七年而成矣名佐倉城云、

諸國圭齋録下總國時宗部ふ三十石（印播郡佐倉郷同郡同郷清光寺）と見えたり

土産　佐倉炭　蒟蒻　三度粟　野駒

本佐倉　城趾あり今の佐倉ふ對ー本佐倉といふ。佐倉風土記ふ千葉介輔胤千葉より城ふ移そとありて注ふ（在今城東六里餘捕木佐倉）とえほそ

東照大神祖慶將門山城文禄元年封武田信吉于此建舘於本佐倉大堀居之云と見えて其後慶長十六年鹿嶋山（今佐倉城ふ與功七年ふして成の後大堀も廢せーふる屋ーどむらー（今本佐倉ふ横ざて大堀濱宿大佐倉の郷名ー）はこ形大佐倉御廟ふとあるを）

諸國圭齋録下總國曹洞宗部ふ二十石（印播郡大佐倉郷勝胤寺）と見えたり

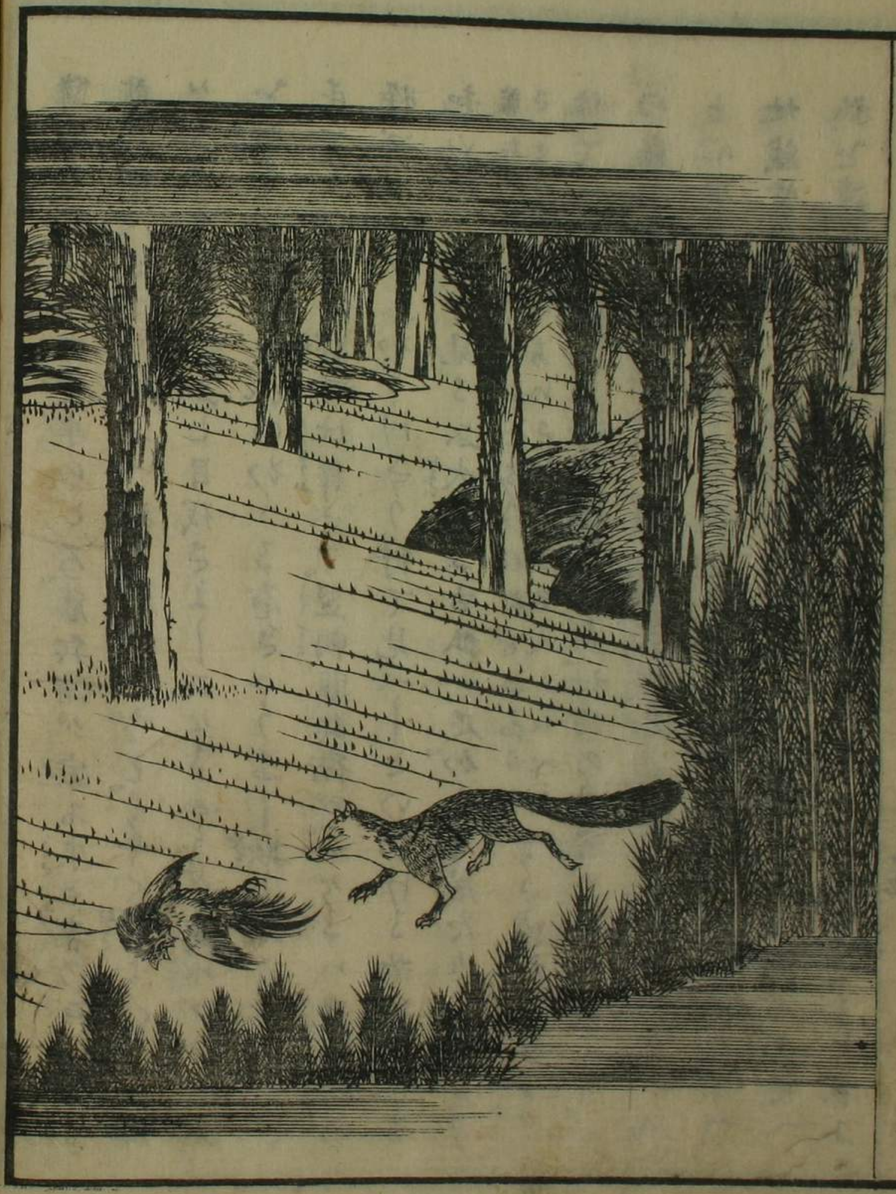
新義真言ふ二十石（同郡大佐倉郷寶珠院）と見えたり

將門大明神　將門山ふあり平將門を祀る故ふ社を以て山の名

もと云。石の鳥居あり銘を刻して曰。奉寄進將門山大明神石華表（右柱）美應三甲午天十一月日總劦印幡郡佐倉城主從五位下堀田上野介紀朝臣正信（左柱）と見ゆ例年八月三日祭禮相撲あり

稻荷藤兵衛　佐倉より一里餘り東の方。墨村の百姓ふもと。あの男常ふ狐をとる事ふ妙を得多り。故ふたらう藤兵衛といふ（物類稱呼）ふ世俗さつ狐狸のありの神使ありといふ故ふ稻荷の二字と音ふとふへてとうかと稱するあるべし藤兵衛常ふ自分屋鋪の裏ふブツチメ（狐を捕る仕かけ也）我掛らへ置此所へ生き来りて捕と云あり時用支ありて常ふ水戸へ往ー帰りもおふをけの原ふて狐ふ出逢ー故ふ欺ー誘ーて我が家へつき帰り裏山のブツチメふかけて捕ーとふもと。此道法十里あまりといくりもこと或日藤兵衛千葉在てその内ふ舟渡三ケ所あり野を通りもる時狐ふ出逢ー故欺ー来りてブツチメふ懸んと志たりーが古狐ゆゑ中ー平安くかゝらず。一両日過てちの狐

隣家の牲ふ化て夜半のころ。藤兵衛が家ふ来り表の戸を叩き。藤兵衛くくブツチメへ狐がかゝるゆゑ。藤兵衛ふと目覚さまー云ゝを懸そふつたり狐のかゝる音さまー云ゝ。今夜ハブツチメをてゝ偶然と寝て仕舞さり。翌朝藤兵衛が云ゝハ夜辺隣の牲ブツチメふかゝり川さり行て見べーといひける故家内の者起いで、至り見るふ大ふる古狐一疋がゝり居たりーとふり（藤兵衛めざまーふとふりの牲を狐ふりとさとり即智のあいさり川誠ふ名人と云べー）住て人家の鶏ふと捕り食ふゆゑ。村内の若者ども相談して。の藤兵衛をたのみ来り。狐を捕る阿見さまー望ミけまべゝれと心安さ支ふり。ふり一後を仕方ーて捕て見をべーとてそふ地蔵堂の庭の池ふブツチメを仕ゝけ置我ハ山ふ到り。此所へ狐を連来りてとる故各々ハ此堂の内ふて見物をべーと。表ふ



竹のそだをさげ。大勢この内ゟ隠れ居たり。藤兵衛いやゞて
支度と〳〵のへて山ゟ入。酒ゟ酔さる声色あて大声あげきつ杯
ハおらぬゝ。狐ヤアーイたうふたゆさめくもあひさやあど、
さんざ〳〵ゟ呼りゟぶら山中残名ごりありくよ。程あく藤兵
衛。狐をつれ大酔の身ぶりあてうの堂の前ゟ出来りぬ。腰ゟ二尋
むかりの縄をつけ。その先ゟ鶏の死〳〵ゐるを結ひ付よろ〳〵
〳〵として引ずりありく。狐ハ是を捕らんとして後ふあり前
ふあり欠まわるを。ゞて藤兵衛懐よりおもろを落そゝハ大功の
物を落〳〵とりゝちくもやりめうぬよ食きてたゐるとのうう
はくハをゐるまゝ。ふど〳〵そとう言〳〵てこうれおゐめを捨ひふ
ぐら終ふたふき卧〳〵たり。狐ハそろ〳〵抔べへより。捨ひ残〳〵
おゐめ残とり食ひ。又後の方へ廻りてうの鶏を曳く。藤兵衛目
残覚〳〵足をあげて是を追ふかくそる支度々ゝあり。狐ハ恠きて

側のブッチメよ近ゟらくやうそを伺ひ段々とふうへ
這入幾度も白ひとうざ終よ餅をくハへて横とひよ飛つそ
其柏子よ別木をつまてブッチメよゟうぬ其自由ふるゐと實
よ座舗の猫と嘲嗤そるう如〳〵予藤兵エよ逢〳〵時餅ハ何ふる
哉と尋さきハ鼠の油揚ありといくり然るやや
佐倉の儒臣窪田其狐藤兵エの傳あう云城之東墨村有猟者名〻
藤兵エ善捕狐〻呼曰稲荷屋稲荷司穀神也。或謂神即狐也。或謂
狐神所使。故謂狐亦曰稲荷以藤兵エ捕狐。又轉曰稲荷屋云稲荷
屋即狐。不施罠罩不持弓銃為製大技方丈餘。設渡数所巨石加其
上以助其重而少開其端支以小柱。繋柱以縄。繋縄以餅。狐来食餅
縄動柱仆從而要落焉以是狐多歴死。又時持餅遠出。拷而所之嘗
夜出。有邑小吏山崎由良治者継至為大叱藤兵エ曰藤兵エ汝農
而不為農好害生数且狐性靈過於人。狐不嘗害苦。貴害狐。如此而

不ニ止得ズ不ル中矣。言畢而去藤兵工惶伏謝罪。既而思之。日余之出也。則以夜至也則深山。非ニ人ノ可ニ至。乃豈老魅誑ス余乎。因テ往来試ニ把ニ所特餌ニ投之ニ若有就而食者大ニ喜。且投且行。既至ニ覆所ニ。則吏死ス于覆中久矣。藤爲帯。双犬在腰。而形已爲ニ狐。尾曳脩々也。由良治爲吏。威信行於民。故狐化ニ其形ニ籍ニ其威ニ以逼ニ其害已也。於是藤兵工名聞乎近郷。数里間野無ニ狂之跡矣。

窪田子曰。藤兵工之事可ニ謂佐矣。然此余之所ニ親聞ニ見ニ而可ニ信者。藤兵工嘗テ云。城中多ニ狐。使ニ我掩殺数日。則積屍如ニ山。快哉言也。夫城狐社鼠人之所ニ共惡ム而不ニ能去者。何也。彼其所ニ託城社ニ也。所ニ貢ニ人主之威ニ而託ニ城社之固ニ以行ニ其蠱魅妖誑之術ニ。雖ニ有ニ猛鷙ニ将垂尾聽命之不暇矣。尚安ニ得而除ニ之哉。然則藤兵工最爲之将如何。曰餌而誘而殺之而已矣

酒井町　佐倉六町の内あり佐倉明細記ニ天正十九辛卯年酒井町建御入国初メテノ取立町ナレハ未久ク榮ユルヤウニ可ニ仕旨　両御所様ヨリ大久保重兵工へ仰付ラルヽ間酒々井篠田大隅其外年寄共ヘ下サルヽ、證文状有之　中略　船著モ先年ハ濱宿御湊ナリケル處新堀舟戸御取立下サレタリ　下略

佐倉風土記云慶長中酒々井北隅ノ渠引ニ印播江ニ而著ニ舟於酒々井而今渠廣只存ニ新堀ノ名耳漕在ニ二道ニ一登戸達ニ佐倉南三十リ寒川並連而在ニ海畔ニ此ニ一大櫻濱達ニ佐倉東六リ迄ニ印播江ニ北十八リ而至ニ利根川ニ而左流而下者入レ海而達ニ江戸馬右從流而下者歷ニ滑川金江津神崎佐原小見川ニ而至ニ銚子ニ入ニ東海ニ又右則過ニ上總而通ニ於常陸陸奥ニ

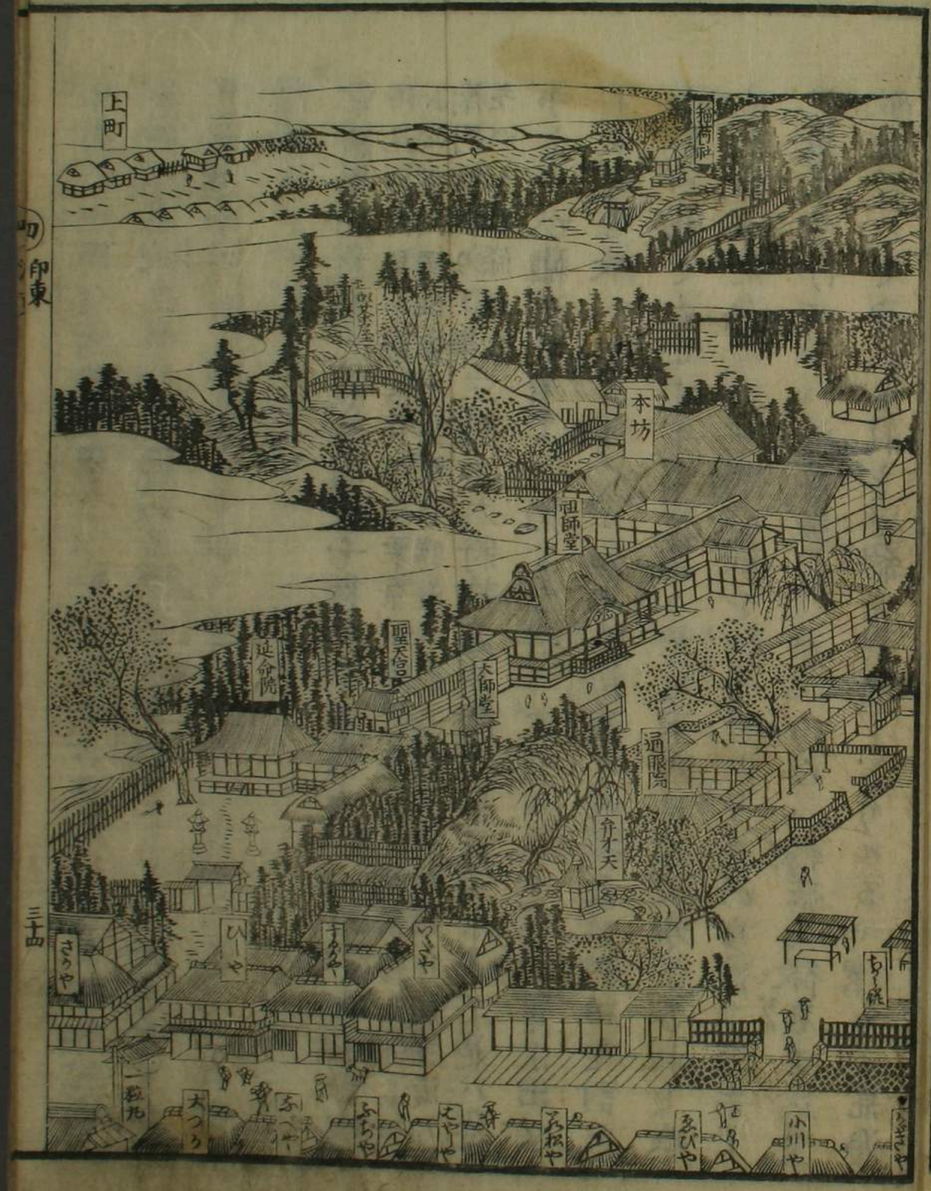
中川　佐倉風土記ニ云出ニ自ニ印播郡尾上ニ乾流而十里過ニ中川ニ而入ニ印播江ニ此處より印播江花島山くまもと遥々ま筑波山も見ゆる

大佛頂寺　岩橋村ニあり創造の年時詳ならず弘法大師大佛頂の法を修する處ありといふ諸國圭齊録下總国新義真言部云十石下岩橋村大佛頂寺とこ由

野馬取　牧ヶ所あり其日ハ當りてい遠近の老若男女郡集ーて見物せ。佐倉風土記云駒、野駒爲良、家駒次」之其野駒在」坰南者自」千葉野」以東至」根古名北者酒酒井」以東至」寺墓曠原縱衡各三四十里風牧」于所々官籍其牝壯消息之數皆有」厲禁歲之六月吏來取」之其執」之處謂之辻」字書無此字俗用此爲押入之義有古訓此訓古米古死二訓此訓古米」辻凡七處曰内野曰高野曰柳澤曰取香傳古之掃墨者出」于此」曰小間古曰矢作曰油揖是也每辻三四十步四圍築」防傍開二門」及時列卒呼噪牧士數騎驅」逐之或百或數十以聚二一所」而納諸辻乃官吏監臨命」牧士簡」擇毛物不可者驅出」之可者留之一人竿頭繫」繩纏」駒首又一人躍上」駒并急抱其頸仆」之執之盡其辻而止矣牧士數十人散居村々三度栗　原野有」之樹不」高子亦小春生」夏華秋實冬和」新苅」之蓋菓栗」蠻也同書此栗一年ふ三度實をむすぶ。故ふ三度栗と云。又冬春の間野を燒時落栗自」やける」是をやけ栗と云。右爲」琢

成田山新勝寺　埴生郡成田村ふ在り不動明王二童子を祀る弘法大師の御作ふーて始ハ山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の本尊かり故ふ靈驗甚多く世ふ知る所あり昔朱雀天皇天慶二年相馬將門亂を起ー、時廣澤遍照寺の寬朝僧正ふ命ー調伏の法を修せーむ乃この尊像を奉持ー難波津より海ふ浮び將門ぐ新都に程近きこの處ふ在て調伏の護摩を修せーゝバ感應忽ふ顯れて明る三年の二月將門終ふ伏誅せりこの後僧正尊像を奉ーて歸洛せむとするふ忽重くーて擧ぐる事能ハず且靈夢の告あるを以て永くこの地ふ留む乃勅ーて伽藍を建て高雄山の寺號ふ准ーて神護新勝寺と號す猶緣起ふ詳ふり」佐倉風土記云。不動堂在成田。曰神護新勝寺不動明王坐像長六尺。弘法大師所」刻。本爲山城國高雄護摩堂之本尊。以下の文意緣起ふ同ー故ふこれを畧す

成田山神護新勝寺不動堂

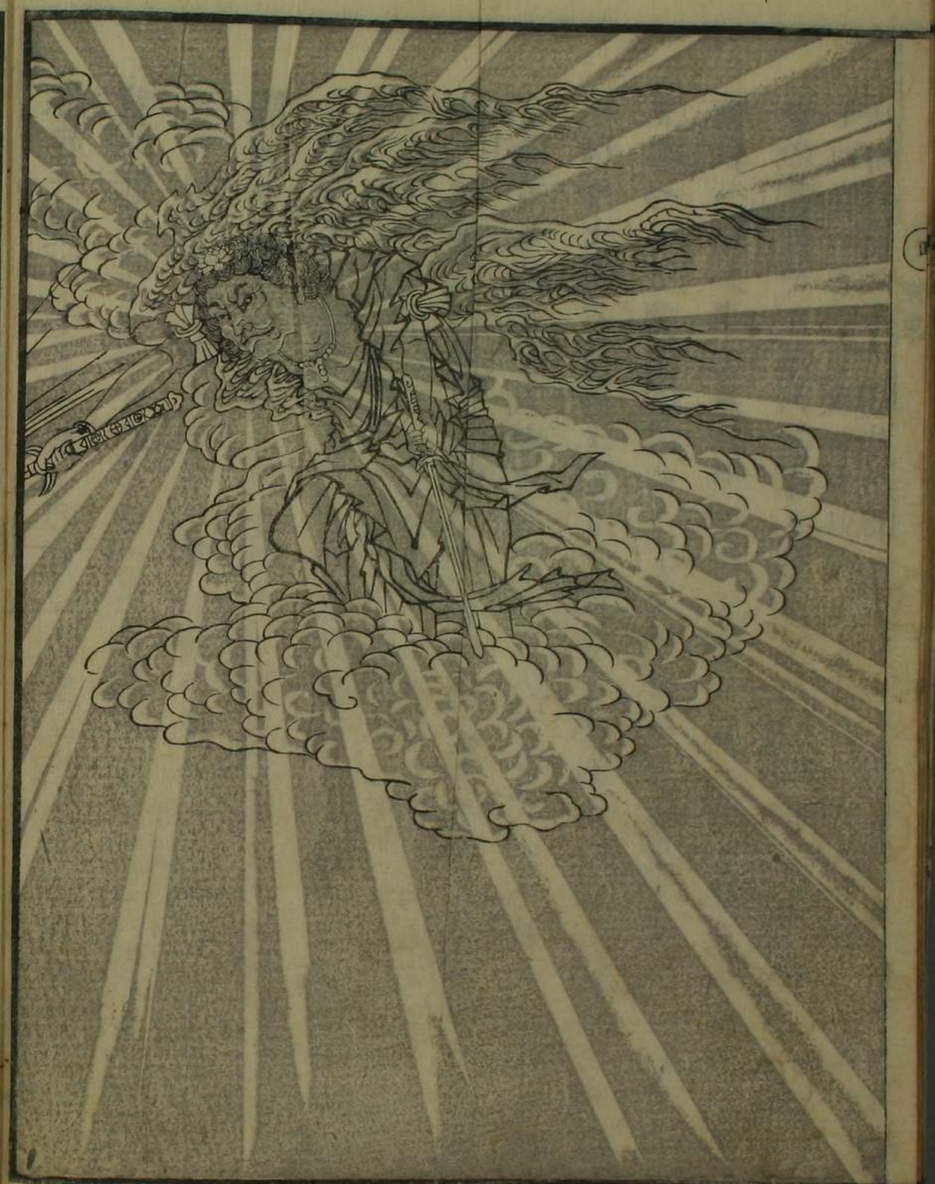


相馬日記巻三云抑坂東ふ不動明王の古靈場三所あり相摸國大住郡の大山寺と武藏國多摩郡の高幡寺とこの新勝寺とかり中畧今三所の中ふこよおう參詣人多ろるハこの成田の靈塲かり

常總軍記巻廿二義長計畧千葉勢敗軍條云これハ天正十三乙酉年常陸國河内郡岡見の岡見中務信貞の臣栗原下總守義長下總國海上郡高田ふ於て同國佐倉千葉新介勝胤の將烏居筑後村田兵衛荒海左衛門を破りし事をいへる條かり三陣の大將荒海左衛門最勇士ふして是ハ荒手といひ愼深き者ふて酒ふも醉ハざりれるがこの軍ふ出でーろビも敵ハ潮の湧くが如く威勢強く大將烏居村田を討ちーかバ物ともせずして荒海が勢を取込めて火水ふかれと攻めーかバ荒海自勇を振ひ敵を數多打取りその身深手淺手十三ヶ處ふ受けて今ハ心身疲れて岸山の谷へ轉落ち微塵ふ爲て敵ふ首ハとりれざれども終ふ討死ーへきりれる中畧爰ふ荒海左衛門ハ軍散じて郎等死骸を尋ねーろビも曾て知れざりる荒海ハ岸山の谷の底ふて死ーれるふ不思議おるろか何方よりとも無く十六七歳の童子二人來りて荒海が死せー屍を撫でろふふ忽荒海息を吹返しー蘇生せり餘ふ不思議ふ思ふ故ふこの邊ふハ見も馴れざる最氣高き小人達かり何處何ろる所よりろ來りせろひてかく我を憐ミろふふや更ふ不審晴れやらず御名を名のりせろへやと申ーれる二童子微妙の御聲ふて我こそ成田不動明王の御使矜迦羅制多迦の二童子かり汝明王を信じ奉る事餘人ふ超え常ふ歩を運ぶ志我が誓願豈空からむや荒海今度軍事ふ出で深手を負ふて今既ふ死すと雖定業ふ非ず急ぎ行きて助くべーと佛勅を蒙り來りき汝必疑ふ事勿と仰ありて光を放ちろひて成田の方へ飛去りぬひれり左衛門夢とも現とも分け難く信心肝ふ銘じ御迹を伏

仰ミれるふ不思議や歩行もおらざる身の何とおう邊おり一
木の枝ふ取付きて立ちーがそれより歩ミ出で一足づゝ運び
行きれるふさーも十三所の深手おれども苦痛も更ふ無くた
どりくて道ふ出るかゝる處ふ左衛門ゞ家子堤户平大夫牟礼
半四郎兩人ハせめて左衛門殿の御死骸を犬烏の爲ふ爲む事
も忠おきふ似ミり亂軍の紛おれバ若やこの谷底ふて死ーゐ
ふふや尋ぬべーと辭離を便ふ取付きて尋収れるふ左衛門ふ
巡合ひーゞ手を負ひーゐ杖子も無く最不審おりーゥバいゥお
る事ふやと問ひれるふ左衛門感涙やるせおくーておがくの
由物語せり兩人も奇異の事ふ思ひ且恙おきを悦び負ひまゐ
らせて荒海の舘へ下總國埴生郡ふ在り歸りたるゞ左衛門ハ太刀疵鎗
創の迹ハ十三ヶ所ありくと著きーゥどもふ只凹ミさるばかりふ
て血も更に走りず痛も無かりれるハ不思議といふも愚おり

緣起云總州生實大巖寺の開山道譽上人ハ天性愚鈍ふーて學
業の進ミ難き事を歎き嘗てこの尊ふ歸依ー參籠持念する事
百日期滿ずる夜の夢ふ不動尊持ちゆふ利劍を呑むと見て即
覺めさり覺めて後これを見れバ黒き血流れて床の邊を穢せ
り然ーて後慧解人ふ勝れ終ふ大德智人と爲りゆふとぞ佐倉風土
記不動堂條云、傳、小弓大巖寺開山道譽、自患資鈍、禱請百日、夢呑
明王劍血流滿床、然後慧辨邁人、其袈裟今猶在而血痕黯然云、
祐天大僧正御傳記古岩南枝著
卷一云圓通和尚祐天剃髪ーて日數
も過ぎその上祐天漸寺家ふ剃れおーミゅへバ徐御經をも教
へばやと思召ー淨土宗ふて初學ふ先教ふる三部經の字數三
五字づゝ口傳ふ教へゆへども中々一字も覺ふーこの如く晝
夜教へゆふ事凡五六十日ふもおりゅへども祐天いゥおる前
世の業因やり單の一字も覺ふーー中畧○この間祐天上人擯斥
を同寮の善長ふ諫められそれより增上寺開山堂ふ一七
日斷食籠を爲ーー靈告を得それより成田ふ赴く事を記す祐天



よく運の極ふや人里離れ一野原ふて路用袈裟衣まで追剥ふ剥取られ前後途方ふくれられし一ぢこの上又もいかある憂目ふ逢ふとてもかゝる大事の立願をおどろ無ふ爲一申さむやと少もおくるゝ意おく遂ふ成田山新勝寺別當の許へぞ着きゐふ急ぎ立願の趣別當へ精く御談ありれバ別當も感ー入り籠堂へ同道あり祐天悦く思召一南無不動尊誓願空からずンバ哀愍納受座一て余ふ智慧を授けゐへ三七日のから斷食身命を盡一祈請一奉る者あり願ハくハ結願のタふハ勿躰おくも不動尊體を現一ゐひ直ふ智慧を授けゐひ天下の名僧と爲ーてさびゐく祐天ぢ胸中を明鏡を照一驗覧有て願望成就おさーめゐへと祈請あるぞおそろしーきこの間一七日の事を畧す　祐天ハ猶も丹誠を抽祈請有り程おく二七日の願境ふもおりれバ旅疲といひ芝ふて開山堂へ籠り斷食致されそれより直ふ復かくの如く斷食二七日ふもおる事おれバ家早御身も疲果て只生きゝる耳の有様おれども一心念力ハ畏といふも餘ありかゝる處ふ奇やある夕方ふ年七旬とも見えれる畏一氣おる姥出來り祐天くと聲をゝけ汝さこそ身も疲果め家早心願を成就せむ何不動納受あらざらむニ七日滿ずれバ速く國へ歸りゐらへ其方途中ふて追剥ふ奪ハれ一鳥目一貫文袈裟衣まで我々取返一來れり此を持て故郷へ歸り學問出精すべーと有りゝれバ祐天も不審晴れゐハずこハ忝き御厚恩いゝおる御方ふて座せバかくハ憐みゐふやらむ御名慕一くゝおり然れども余ぢこの度の立願ハ懸命の念願ありて三七日のから斷食是非この日數滿てずンバ置くべからずよーそれまで不飢死せバ本望よ必々御恤下されおと歸る氣色と見えざれバ姥ハ麓へ歸りれり暫過ぎて又出來る

ハ別當の僧祐天くと聲をゝけ汝漸身も疲れさり寂早立願成就せり天下の名僧と爲る事疑ふ事あるべからず三七日籠すゐおよバずこれより直ゐ立歸り學問出精するからバ世ゐ比おき智慧僧とゐるべし早とくくとのゆへバ祐天首を回らし愚ふる別當の仰ゝゐ段々の御教御情ゐ似されどもこの度の立願ハ命を惜ミ身をかばふ如き愚ゐる願掛ゐ非ず思詰めさる事ゐれバ必三七日籠り眞の不動の尊體を拜し智慧を授ゝり終るまで中々國へハ歸るまじ必御捨置下さるべし飢死ゐ及バゝ本望ゐりと血眼ゐ爲てのゆへバ奇や今まで晴れさる空卒ゐ震動雷電して岩を碎き石を飛バし御堂の震動たゞ事ゐらず祐天少も畏れゆハず一心不亂ゐ不動を念じ假令岩ゐ摧ゝれても一心の毫髪爰ゐ止まり眞の不動を拜し奉らずンバ體ハ微塵とゐらバゐれと怒の皆裂くるゞ如くロゐ不動の御名を唱へ動ずる氣色ゐかりれる猶と奇ハ今まで別當の僧と思ひしゞが卒ゐその長一丈許の不動と現れ御身より火焔を出し左右の御手ゐ長短の利劍を提げ善哉く吾ハ是成田不動ゐり汝ゞ丹誠無二の念力類ゐき事を感じ今現れて示す者ゐり汝ゞ前生の罪惡深き事二世三世死變生變りても盡る時あるべらず此ゐ因て今生ゐ於ても明盲とゐりさるゐり今より智慧を授からむと思ふゐらバこの長短二劍の內一振呑て藏腑の惡血を吐出さしゝ新血を生じて生改めて智慧を授ゝれこの二振の中長きを呑むべきや短きを呑むべきや否や祐天愼で曰く短きを呑ミても體を破らむ長きを呑ミても體を破らむ何を呑ミても體を破るゐ二ハ無しゝ余長きを呑まむと大ロを開て待ちゐへバ忝も不動尊咒を唱へゐひ右の御手の長きを情ゐくも祐天のロへ刺しゝゐへバわつと言ひて俯きその

儘息ハ絶果ふれりかくて新勝寺の別當ハ夜もほのぐと明れけれバ祐天の事を不便ふ思ひ今頂ハ料身も疲れぬらむ二七日を滿てぬれバ飢羸れて死せむも知れずいざ訪ひて事問ふべーと籠堂へ參られて祐天の有樣を見ゐふふ血ハ流れて體を浸ー侑ふ伏ーて息斷えさり別當仰天ーゐひーがつぐぐと樣子を見ゐひて是さゞ事ふてハ有るまじこの籠堂へ他人の入るべき樣と無ー不動の爲さーめゐふらむと急駭の僧を集め即座の護摩を焚きゐひ不動尊を念じて曰く祐天小僧一念の誠心二七日ふ滿つ願ハくハ祐天蘇生ーてこの有樣を明白ふ明らーさびゐへとせめろけく祈りゐへバ不つと息をつきむぐと起きて別當ふ向ひ只今まで數々の御芳志生々世々忘れまじ立願成就ーて眞の不動の尊體を拜ー智慧を授ろりゅおりその外劔難の次第不思議の事ども一一ふ語りゐへバ

一座の僧さち感じ奇異の思を爲ー別當も祐天をかき撫でゝ前代未聞の名僧やと感じゐふ事限おー先御利生の實を見むとて般若經を一度讀さて聞ろせゐへバ祐天これを聞取り固より知れるゞ如く一字一點の差も無く誦じゐふぞ奇おるこの書甚誤ありーを今大率正ーて引きさりて同書卷四祐天上人土浦の淨福寺ふて說法ありー歸るさ法華宗徒の害せむとせーを不動尊雷雨を起ーて拒ぎー事をいへり今これを畧す祐天上人の事ハ祐天大僧正傳及び三緣山志ふ精ー世ふ一相無切有居士の祐天上人一代記とて六卷あるハ戲作ありス累女解脫の事ハ新著聞集卷五近世奇跡考卷二相見えさり別當ハ祐天小僧一念の誠心二七日ふ滿つ願ハくハ祐天蘇生ーてこの有樣を明白ふ明らーさびゐへとせめろけく祈りゐへバ不つと息をつきむぐと起きて別當ふ向ひ只今まで數々の御芳志生々世々忘れまじ立願成就ーて眞の不動の尊體を拜ー智慧を授ろりゅおりその外劔難の次第不思議の事ども一一ふ語りゐへバ馬日記卷二云成田不動尊ふ詣くれてゝ御前の町家ふ舍りーふ隣ふ集まれる男女どもゐ騷ぐーう物いひうちさるゞひて安寢もせさせす夜追の馬の鈴の音耳近く聞こえ龍人らゞ丑のくびぞおど言過ぐるハいさう更けぬるおるべー

不動奉納
二童子の白きもひとり雜阮花

蓼太

利根川圖志卷四終